

臨床心理学コースは、全学年共通課題の課題Aと学年別課題の課題Bがあります。
各人この両方に取り組んでください。

<課題 A：全学年共通課題>

今回の震災は、被災された方々はもちろんのこと、被災地域から離れていても、多くの人の生活や心理に様々な影響を与えています。地震発生時の体験、その後も続く余震やマスメディアからの情報、計画停電や電車運行状況の変化など、今回の地震がもたらした被害・影響は甚大です。自分や家族が被災した人、親族や知人で被災された方をもつ人もいます。こうした状況の中で、あなたが感じていること、考えていることを言葉にしてください。まだ冷静に受け止められない人もいるでしょうし、なかなか考えをまとめられない、言葉にできない人もいます。この課題では、うまく整然と考えをまとめる必要はありません。今の自分に向き合って、自分の気持ち、身体の状態に静かに注意を向けてみてください。自分が今回の震災をどう受け止めているのか、自分がどんなふうに影響を受けているのかに気づくと思います。それを素直な言葉で記述してみてください。臨床心理学は、心に向き合う学問です。他の人を理解したり、援助したりすることと同様、自分の状態に気づいておくことも大事にしています。一般論ではなく、自分が今回の事態をどう受け止めているか、言葉にしてください。

①課題：今回の震災を自分がどう体験しているか、その中で感じていること、考えていることを書きなさい。

②レポートの体裁：A4判（1200字程度）で1～2枚程度。別に表紙を付け、タイトルと学籍番号、氏名を記載し、ホチキス止めをして提出すること。

③提出期限：2011年5月9日 17:00

④提出場所：5号館2階 臨床心理学科閲覧室前のレポート提出ボックス

⑤評価：課題Bの評価に加味する。いわゆる「良い評価」を目指す必要はない。自分の体験に誠実に向き合って書かれていればよい。不真面目な内容や一般論の抜き書き、大幅な分量不足などは減点の対象とする。

この課題についての質問や問い合わせは、臨床心理学科助手の藤田（rinshoshinri2@mail.tais.ac.jp）までご連絡ください。または大正大学のホームページから臨床心理学コースのブログやT-Poで公開する4月オフィスアワーに来て、どの教員でもかまいませんので直接質問してください。

＜課題B：1年生・新編入生（学籍番号が11で始まる学生）用＞

I. 学習テーマ設定の趣旨

人と人とのつながりを大事にする臨床心理学科としては、本来ならば例年通りに互いの紹介をし、大学のシステムについて説明した上で、対面での授業で学習に取り組みたいところですが、今年は震災の影響により、各自で取り組める自習課題を設定することになりました。難しい課題ではありませんし、むしろ自分の経験を思い出しながら、興味をもって意欲的に取り組んでもらえたらと思います。4月中は、ブログを通じて学習状況へのメッセージを配信します。また、質問を受ける態勢や質問に来られるオフィスアワーなどを用意しますので、分からないことや聞きたいことがあればサポートします。安心して課題に取り組んでください。

1年生は、「基礎ゼミナールI」で人間の心理的発達について学ぶことになります。子どもから青年にかけての成長のプロセスは皆さんも経験してきたものですし、臨床心理学の入り口としてとても分かりやすいと思います。人間は、体が成長・変化するだけでなく、考え方や感じ方、人との関係の持ち方、自分を表現する仕方など、年齢とともに様々な面で変化をします。これからそうしたことを勉強するにあたり、まず今回の課題で自分の成長も振り返りながら、子ども時代の感性を思い出してみましよう。

課題の内容は後で説明しますが、こうした感性の例を紹介しておきます。朝日新聞での連載でもありますが、読者からの投稿をまとめた「あのね 子どものつぶやき」（朝日新聞社）という本には、次のような子どもたちの言葉が載っています。

- ・手洗いで「ちゃんと泡を立ててから水で流すのよ」と言われて、「泡って立ったり座ったりできるの？」（5歳）
- ・スイカをたくさん食べた日の翌朝、「きょうのおしっこは赤いかもしれん」（3歳）
- ・夜空を見上げて、「お日さまは空を青く照らすけど、お月さまは空を黒く照らすんだね」（3歳）
- ・祖母と電話中。「うちね、きょうカレーなの。電話、耳にあてないで鼻にあててみて。いいにおいするでしょ」（3歳）
- ・電車の進行方向を背にして座って。「ママ。この電車、何でバックばかりしているの？」（2歳）

いずれも、大人になると思いつかないような発想ではないでしょうか。自分の子どもの頃、同じようなことはありましたか？大人の合理的・理性的な発想とは違う、素朴で子どもらしい感じ方や考え方、エピソードなどはあったでしょうか？臨床心理学では、こうしたちょっとした言動の中に、子どもにとっての世界の見え方、子どもが世界をどう体験しているか、子どもの側からの考え方や感じ方を知る手がかりを見出します。これから発達について学び、心理学的な理解を深めるためには、単に知識を覚えるだけでなく、それぞれの年齢・年代の子どもたちがどのような体験をしているのかという実感を伴った理解が必要になります。この課題を通して、自分の経験を振り返り、なおかつ他者の経験とも照らし合わせながら、発達の道筋を考えてみましょう。

II. 学習テーマの内容

子ども時代のエピソードを描いた本（自叙伝や自伝的小説など）を1冊読み、本の内容を踏まえながら、子どもの考え方や体験の仕方について考察しなさい。

自伝的小説の例

- ・黒柳徹子 「窓ぎわのトットちゃん」 講談社文庫
- ・井上靖 「しろばんば」 新潮文庫
- ・河合隼雄 「泣き虫ハアちゃん」 新潮文庫
- ・ドナ・ウィリアムズ 「自閉症だったわたしへ」 新潮文庫
(自閉症の人の子ども時代の自伝本です。)

III. テーマ学習の方法

(1)本を選ぶ

本を読むのは、自分の経験を思い出しやすくするためでもあり、自分の経験と比較するためでもあります。そのためには、まったく架空の小説よりも、ある程度の実実に基づいて書かれた本の方が望ましいといえます。また、伝記のように他者によって書かれたものよりも、本人が自分の体験を子ども時代の視点で描写しているものの方が適しています。そういう意味で、自叙伝や自伝的小説という条件を付けましたが、こうした目的にかなっていれば、上の3冊にこだわらず、自分が関心をもつ本を選んでかまいません。

「アンネの日記」のように、大人が回想したものでなく、子ども自身が書き綴っているものでも目的にかなっています。ただし、インターネット上の小説や日記などは、作者に関する情報や内容の信憑性が保証されないので、不可とします。

(2)読む

もちろん興味をもって読めばいいのですが、今回の課題は実感を伴って子ども時代の感性を思い出すためのものですから、できるだけ主人公の身になって感情をこめて読んでみましょう。読みながら、自分の子ども時代のことを思い出したら、メモしておきましょう。他にも、感想や考察が浮かんできたら、それもメモしておくといでしょう。

(3)考えをまとめる

さあ、読み終わって、どんなことが印象に残ったでしょうか。特によくわかるところ、自分の経験と重なるところ、子どもならではの面白い視点、ハッと驚くような感性、自分の子どもの頃とは全く違う体験など、様々な視点から見てみてください。

それは、子どもがどんな考え方、感じ方、体験の仕方をしていることを表しているのでしょうか。大人との違いがあるとすれば、それは何でしょうか。当時の自分の体験があるなら、それを今どのように説明できるでしょうか。

それらを一一つ丁寧に上げて説明してもいいですし、共通するものをまとめて、いくつか分類して論じてもいいでしょう。また、興味をもったことがあれば、子どもの心理について本で調べてみましょう。

(4)レポートを書く

1年生のうちには、レポートを書くとか、発表の資料を作る、皆の前で発表する、グループでディスカッションする、など、大学生としての学習スキルを身につける時期でもあります。早速ですが、レポートに挑戦してみましょう。

パソコンを使う人は、A4判縦で文章は横書きに設定し、文字数は40字×30行に設定しましょう。手書きの人は、A4判のレポート用紙を用意してください。提出にあたっては、鉛筆書きではなく、ボールペンなどで清書してください。

まず、1枚目は表紙とします。中央に大きくタイトルを付けましょう。「〇〇を読んで」とか、「〇〇の『△△△』を通して考える子どもの心理」などが考えられます。右下に、提出の日付（2011年5月9日）、提出者の学籍番号、提出者氏名を書いてください。

本文は2枚目から書きます。2枚目にはタイトルは不要ですので、すぐ本文から始めてかまいません。もしいくつか分類したり、内容を分けて書くなら、小見出しを付けましょう。「1. ※※※について」「2. ***について」などです。誤字・脱字に気を付けて、自分の言いたいことを丁寧に書いてください。何の本を読んだのかは、必ず明記してください。

最後に、表紙を一番上にして、ページをそろえて左上の1ヶ所だけホチキス止めをしてください。これで提出となります。

IV. レポート・評価

レポートは、プリントアウトする場合はA4判で2～3枚程度とします（1枚1200字を目やすに）。手書きの場合は、全体で3000字程度を目やすに書いてください（プリントアウトよりも枚数は増えると思います）。

いずれの場合も別に表紙を付け、タイトルと学籍番号、氏名を記載し、ホチキス止めをして提出してください。「臨床心理学基礎ゼミナールI」の評価に加味します。「臨床心理学基礎ゼミナールI」授業初回時（5月9日 3限）に担当教員に提出してください。

V. 問い合わせ先

この課題についての質問・問い合わせは、下の通り1年生用の質問時間を設けますので、大学に来られる人は直接聞いてください。基礎ゼミナールI担当の教員が質問に答えます。

- ・4月11日（月）3限（13:05～14:35） 5号館2階 実習閲覧室
- ・4月18日（月）3限（13:05～14:35） 5号館2階 実習閲覧室

また、メールでの質問は、臨床心理学科助手の藤田（rinshoshinri2@mail.tais.ac.jp）までご連絡ください。

他にも、学習状況に応じてメッセージを配信しますので、ときどき大正大学のホームページから臨床心理学コースのブログで最新情報を確認してください。

＜課題B：2年生

（または学籍番号が10以前で始まる学生で総修得単位数が62単位未満の学生）用＞

I. 学習テーマ設定の趣旨

2年生は基礎的な学習を踏まえた上で、臨床心理学が実際の現場でどのように使われているのか、必要とされているのかに目を向けてもらいます。臨床心理学は、机上の理論や実験室での研究ではなく、実際の臨床現場や対人援助の場面で求められながら発展してきました。2年時の必修科目である「臨床心理学基礎実習Ⅰ・Ⅱ」では、様々な臨床現場から講師を招いて、実際の仕事の様子をうかがいます。その一環として、自分が関心をもっている対人援助場面・職業の仕事内容や実際の様子などを調べてみましょう。これからの学習で一層の目的意識と緊張感を持続させるためにも、心理臨床の現場や対人援助の現場に目を向けてもらいたいと思います。

II. 学習テーマの内容

自分が関心のある心理臨床や対人援助の仕事・場面で、援助職（臨床心理士、カウンセラー、セラピスト、その他）がどのような仕事をしているのか、調べてみることに。自分が目指している対人援助の仕事があれば、それについて調べるとよい。この課題では、狭義の心理援助にこだわらず、人と人が出会い、支えるような状況をすべて「対人援助」ととらえてよい。例えば、学校のスクールカウンセラー、企業内の産業カウンセラー、老人福祉施設の介護士、教育相談担当の先生、等）

さらに、それを調べてみて自分がどのような感想をもったか、自分の将来像など自分に引き付けながら感想を書くこと。

III. テーマ学習の方法

仕事の内容、実際の場面、その仕事の難しさ、やりがい、工夫しているところなど、自分の関心をもとに、実際の仕事の様子を調べてみることに。次のような方法を組み合わせながら資料を集めることが考えられるが、いずれも信頼できる情報であることを十分確認し、出典や情報の出どころを明示しながらまとめること。

①身近でそういう仕事をしている人に接したことがあれば、その時の様子や話を思い出しながら。（新たにインタビューをするのは、先方に迷惑をかける可能性があるので慎むこと。また、インタビュー可能という場合でも、事前に大学の教員に相談すること。）

②文献を通して

1冊にまとまったものでなくても、本の中でその仕事の実際を紹介しているような本は多い。特に心理臨床にかかわるものとして、一例をあげておく。

＜さまざまな心理臨床の現場について＞

- ・乾吉佑・平野学（編著） 2004 臨床心理士になるには ペリかん社
- ・滝川一廣・伊藤直文（編著） 2007 こころに気づく 日本評論社
- ・桑原知子・辻村徳治（編） 2001 家裁調査官レポート 日本評論社

<心理療法という仕事の実際>

- ・河合隼雄 1977 心理療法の実際 誠信書房
- ・河合隼雄 1990 事例に学ぶ心理療法 日本評論社
- ・岩宮恵子 1997 生きにくい子どもたち カウンセリング日誌から 岩波書店
- ・河合隼雄・山中康裕・小川捷之（総監修） 心理臨床の実際1～6 金子書房

<臨床心理士・カウンセラーが語る臨床の現場や自分の背景>

- ・河合隼雄 1999 閉ざされた心との対話（上下） 講談社
- ・一丸藤太郎 2002 私はなぜカウンセラーになったのか 創元社（これは厳密には臨床現場の内容ではないが、“カウンセラー”にはどういう人がいるのか、その個人的な背景が書かれている本として参考になる。）

③ドキュメンタリー番組などから。

テレビ番組（NHKアーカイブス、放送大学などを活用）やビデオ（DVD）などで心理臨床や対人援助場面を取り上げたものを見る。番組のタイトルや視聴日を明記すること。

④インターネット情報

施設や機関としてその現場の様子を紹介しているものであれば、参考になるだろう。個人が開設しているホームページやブログでも、信頼できるものであれば参考にしてよい。発信者が匿名やハンドルネームだけの書き込みなどは、使用不可。

インターネットの情報は、特にその信憑性を吟味して使うこと。どういうサイトからの情報であるかをレポートに明記し、最後にそのアドレスを載せること。また、そのサイトが閉鎖された時のために、自分が閲覧した時のページを印刷して保存しておくことよい。

IV. レポート・評価

レポートは、A4判で2～3枚程度とする（1枚1200字を目やすに）。別に表紙を付け、タイトルと学籍番号、氏名を記載し、ホチキス止めをして提出すること。「臨床心理学基礎実習Ⅰ（既修得者はⅡ）」の評価に加味する。「臨床心理学基礎実習」授業初回時に担当教員に提出すること（既修得者は5月10日の11時までに5号館2階 閲覧室前のレポート提出ボックスに提出すること）。

この課題についての質問・問い合わせは、「臨床心理学基礎実習」担当の伊藤直文・廣川進・犬塚峰子先生まで。連絡方法は「知のナビゲータ」やT-Poで確認すること。または、臨床心理学コースのブログで公開する4月オフィスアワーに来て直接質問してもよい。

＜課題B：3年生（または学籍番号が09以前で始まる学生で総修得単位数が62単位以上90単位未満の学生）用＞

I. 学習テーマ設定の趣旨

3年生は、これまでに心理学・臨床心理学の基本的な内容と様々な心理臨床領域について幅広く学習してきたと思います。大学生後半を迎えるにあたって、これからの学びではさらに深く学ぶ姿勢が求められます。臨床心理学は、必要な知識を覚えれば済むという学問領域ではありません。人と接し、人を理解する場面を考えてみれば、その人が話してくれることを漫然と受け取っているだけでは深い理解にはつながりません。積極的に関心を持ち、考えと想像をめぐらせながら、こちらが理解したことを言葉にして確認したり、疑問に思うことを尋ねたりする中で、その人のことが理解できていくのです。これは、実は研究に対する姿勢と同じです。すでに答えが本に書かれているようなテーマは研究する必要はありません。自分が関心を持ち、これはどうなのだろう、と疑問を持ち、調べ、考えながら、自分が理解したことを言葉にしていくという作業なのです。

3年時、4年時では、卒業論文や各自の研究を念頭に置いた授業や課題が用意されています。それは、研究のための研究、レポートのためのレポートが目的なのではなく、自分で考え、粘り強く、そして深く考える姿勢を身につけてもらうためです。卒業してからも、人と接し、深く理解しようとする姿勢につながりますし、さらには仕事上でも、生き方の面でも、誠実にものごとに取り組む姿勢はきっと役立ちます。

こうした趣旨をふまえて、この自習課題では、自分で決めたテーマについて、資料を調べ、内容を理解し、それをもとに自分で考える練習をしてもらいます。

II. 学習テーマの内容

自分が関心のあるテーマに関する本を3冊（学術論文ならば5本）以上読み、そこから自分が理解したこと、疑問に思ったことなどをまとめなさい。

III. テーマ学習の方法

まず、関心のあるテーマについて文献を調べること。図書館や書店で書棚を見るだけでなく、下のような文献検索ツールを利用して、適切な文献を探すこと。文献検索は、キーワードでの検索、そのテーマに関する入門書や概説書の通読、そこから主要な研究者や著書を見きわめ、さらにその人名や書名で検索、主要な文献を探し当てる、といった流れで進めるとよい。

＜文献全般＞

- ・大正大学図書館 (http://www.tais.ac.jp/related/tais_library/)
- ・Webcat-Plus (<http://www.webcatplus.nii.ac.jp/>)

＜学術論文・雑誌論文＞

- ・CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>)
- ・GoogleScholar (<http://scholar.google.co.jp/>)

文献が見つかったら、次のような点を考えながら読み進めるとよい。

- ・そのテーマに関する基本的（中心的）な理論や概念は何か。
- ・代表的な研究（複数の文献で紹介されているもの）はあるか。代表的な研究者は誰か。
- ・自分が読んだそれぞれの文献の概要や著者の主張を整理する。
- ・以上でそのテーマについて全て明らかになったといえるか。疑問点や矛盾点、まだ自分が知りたいと思う疑問はあるか。（例えば、外国の研究結果が日本人にも当てはまるか、学生を対象にした先行研究結果は、広く日本人全般の傾向と言えるか、男女で違いはないか、昔の理論が現代でも通用するか、その理論で足りないところはないか、その理論が当てはまらない事象はないか、など）
- ・疑問点や自分が関心をもったことがあれば、さらにそれを調べるとしたらどのような方法が考えられるか。

こうした点を丁寧に文章にまとめると、今回の課題が完成する。

IV. レポート・評価

レポートは、A4判で3枚以上とする（1枚1200字を目やすに）。別に表紙を付け、タイトルと学籍番号、氏名を記載し、ホチキス止めをして提出すること。「臨床心理学専門ゼミナールⅠ」の評価に加味する。各専門ゼミの初回時に担当教員に提出すること。

この課題についての質問・問い合わせは、各自の「臨床心理学専門ゼミナールⅠ」担当教員とする。連絡方法は「知のナビゲータ」やT-Poで確認すること。または、臨床心理学コースのブログで公開する4月オフィスアワーに来て直接質問してもよい。

＜課題B：4年生

(または学籍番号が08以前で始まる学生で総修得単位数が90単位以上の学生)用＞

I. 学習テーマ設定の趣旨

4年生は、卒業論文に向けた作業を進めてもらいます。12月までまだ時間があると思っているかもしれませんが、この時期にしっかり卒論に取り組んでおくことはとても大事です(今年の6月提出予定の人は言うまでもありません)。具体的に調査やインタビューなどを始める前に、先行研究を踏まえて、自分の問題意識や研究目的をできるだけ明確にする必要があるからです。テーマは1人1人違います。また、研究の方法も、人によって違いがあります。しかし、先行研究を調べ、文献をまとめることは全員に求められることです。卒論ゼミが始まるまでに、そうした作業に着手してもらうことがこの課題の目的です。

II. 学習テーマの内容

①卒業論文で取り上げるテーマについて、どのような資料があるのか、文献リストを作成する。

②文献リストの中から、3編以上(書籍1冊以上と学術論文を含む)を取り上げ、その内容のブックレビューを作る。

③その上で、自分がこのテーマのどこに関心をもっていて、どういう問題意識があり、それを明らかにするためにどのように研究を進めようと思うのかを文章でまとめる。

III. テーマ学習の方法

まず、卒業論文で取り上げる予定のテーマについて文献を調べる。図書館や書店で書棚を見るだけでなく、下に挙げるような文献検索のツールを利用して、適切な文献を探すこと。論文を書く上では、先行研究や文献のまとめが不可欠である。1冊や2冊で書けるものではないので、できるだけ数多く文献を調べておくことが望まれる。

＜文献全般＞

- ・大正大学図書館 (http://www.tais.ac.jp/related/tais_library/)
- ・Webcat-Plus (<http://www.webcatplus.nii.ac.jp/>)

＜学術論文・雑誌論文＞

- ・CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>)
- ・GoogleScholar (<http://scholar.google.co.jp/>)

①のブックリストは、「臨床心理学のための調査研究入門」p.125を参考に作成すること。単行本であれば、著者名、発行年、書名、出版社、の順となる。それぞれの文献に応じた書き方を遵守してリストを作成すること。

②のブックレビューは、それぞれの本(論文)の内容を簡潔に書き、さらに特に自分の論文に関係するところはページや章・節なども付記して丁寧にまとめておくとよい。後で自分の論文に使うことを念頭に、まとめること。

③の課題では、①と②で調べたことをもとに、自分の研究の動機や意欲を確認するつも

りで書くとよい。なぜそれに関心があるのか、何を知りたいのか、それを知ることがどのように必要なのか（自分や社会にどう役立つのか）、などを自分に問いかけながらまとめてみよう。その上で、具体的な研究計画や研究方法を考えてみてほしい。いつ頃、誰を対象に、どんな方法で調べるのか、などを考えてみること。（消極的に、調査やインタビューを敬遠して文献研究を選ぶ人がいるが、文献研究は何十・何百もの文献を集めて、内容を読み込み、自分なりの切り口で新たな見解を導き出す難しい研究方法であることを覚悟した方がよい。）

IV. レポート・評価

②のブックレビューおよび③の課題は、あわせてA4判で5枚以上とする（1枚1200字を目やすに）。①のブックリストは枚数の指定はない。別に表紙を付け、タイトルと学籍番号、氏名を記載し、①から③のすべてをホチキス止めして提出すること。「卒業論文」の評価に加味する。卒論ゼミの初回時（4/26のガイダンスで指示あり）に指導教員に提出すること。

この課題についての質問・問い合わせは、自分の卒論指導教員とする。連絡方法は「知のナビゲータ」やT-Poで確認すること。

または、臨床心理学コースのブログで公開する4月オフィスアワーに来て直接質問してもよい。